

女性脳からのラブレター

第1回

黒川 伊保子

(株) 感性リサーチ 代表取締役
日本感性工学会評議員



今朝私は、右手の小指の付け根をキッチン・カウンターにぶつけてしまった。思いがけず痛かったので、ちょうど台所に入ってきた息子に「ううう。手をぶつけちゃった」と甘えた。…と思ったら、その人影は、オットだったのである。私は咄嗟に「しまった」と思った。

「しまった」と思ったのには、理由がある。結婚23年、こんなときオットが素直に甘やかしてくれたことはないからなのだ。案の定、こんな会話になってしまった。

オット：「どうして手をぶついたりするわけ？」

私：「手を振り回したから」

オット：「なんで手を振り回すんだ？」

私：「んー、その質問に答えることに何の意味があるの？」

オット：「理由がわからなきゃ、対策が立てられない」

私：「私はただ、可哀想に、と言って欲しいだけなのに」

オット：「可哀想に、と言われることに何の意味があるんだ？」

うー、ストレスが溜まる。女がただ甘やかして欲しいときに、要らぬ問題解決を試みるのが男というものらしい。そうとは知っていても、ため息が出る。

息子なら、「あー、可哀想に。バンドエイドってあげようか？ 朝ごはんは適当に食べるから、休んでいいよ」くらいは言ってくれる。もちろん、私がそう育てたからである。私と出逢ったとき、オットの男性脳は既に完成していたので、矯正が不可能だったのだ。

女性脳は、男性脳に比べ、右脳（感じる領域）と左脳（考える領域、言語機能局在側）の連携が遥かにいい。そのため、感じたこと

が即ことばになる脳なのである。

美味しい焼き鳥をほおぼりながら、女たちは言う。「このじゅわっと出てくる肉汁がたまらない。皮もかりっとしてるよね」「スパイスが絶妙なよ」「ゆずこしょう？」「そうそう、それぞれ！」「こんな美味しいもの食べれて私たち、しあわせよねえ」「ねえ〜っ」

こんな姦しいおしゃべりを50~60代の男たちがしているのを、見かけたことがあるだろうか。感じたことが即、顕在意識に上がる女たちは、自分の感情変化にも、目の前の人の感情変化にも敏感に反応する。このため、互いの感情を察しあって共感しあうのが、女性脳にとっての対話すなわちコミュニケーションなのである。

だから、自分の身に起こったとりとめのない出来事を会話にして垂れ流す。今、口になっている料理の味、さっき店の前で転びそうになった話、今朝、寝坊しそうになった話等々。受ける相手は、ただただ共感して、受け流していけばいいのである。

間違っても、勝手に問題解決はしない。「相談があるんだけど」「どうしたらいい？」と尋ねられるまでは。それが、女性の会話のプロトコル（約束事）なのである。

お願いだから、愛しい男性脳たちよ。私たち女性脳を優しく慰撫するように、話を聞いて欲しい。「それは何の話だ？」「結論から先に言えないのか」などと、話の先を急がせないで。

あいづちのコツは、相手のことばの繰り返しである。女が「寒かったのよ」と言ったら「寒かっただろうね」、「痛かったのよ」と言ったら「痛かっただろう。可哀想に」…それだけ。間違っても「薄着だったんじゃないのか。もう年なんだから気をつけろ」「お前はいつだって不注意だからな」なんて問題解決を試みないで。

女の話は、とりとめがないだけじゃない。結婚21年目くらいになると、代名詞が増えてくる。妻「あれだけどさあ」夫「あれってなんだ？」というように。結婚28年目ともなれば、主語も目的語も消える。そうすると、繰り返してやることばさえも見つからない。

でもね、本当に女の話は厄介だなんて、ため息をつかないで。これこそが、妻が夫を愛している証拠なのである。それがどういうことなのかは、この連載でおいおい語ろうと思う。さあ、女性脳からのラブレターのはじまり、はじまり。来月もお楽しみに。



●プロフィール：くろかわ いほこ
コンピューターメーカーにてAI（人工知能）の開発に携わり、脳とことばの研究を始める。やがて、脳機能論の立場から、語感の正体が「ことばの発音の身体感覚」であることを発見。AI分析の手法を用いて、世界初の語感分析法である「サブリミナル・インプレッション導出法」を開発し、マーケティングの世界に新境地を開拓した、感性分析の第一人者である。